

第3回「犯罪からの子どもの安全」シンポジウム

「いざというとき なにが頼りか - どう身を守り、どう助けるか -」

2010年3月16日に東京都中央区の時事通信ホールで独立行政法人 科学技術振興機構 社会技術研究開発センターが主催する「犯罪からの子どもの安全」研究開発領域 第3回シンポジウムが開かれました。

今回で3回目。回を重ねるごとに参加者も増加しており、今回は250名の方が参加され、会場の席が足りなくなるほどの盛況ぶりでした。このことから、この領域の期待度の高さが伺えます。



大勢の方々が詰めかけた会場

今回のシンポジウムは、「子どもの力」「大人の力」「地域の力」という3つの力をキーワードに構成されています。子どもを犯罪から守るためには、まず、子ども自身が身を守る力をつける必要があります。その上で、大人やさまざまな機関が子どもたちを守る力をどのようにつけていき、個々の取り組みをどのようにして連携して、地域全体の力にしていくかが問われます。この3つの力のうち、どれか1つでも欠けると、子どもの安全が脅かされてしまうでしょう。前半は、子どもの力や大人の力を高めるために領域で研究開発に取り組んでいる4人のプロジェクト実施者が講演をしました。

●イントロダクション●



「犯罪からの子どもの安全」領域総括／東京電機大学 教授
片山 恒雄氏

片山領域総括は開会挨拶の中で、シンポジウムのテーマとなっているサブタイトルを、第1回、2回のシンポジウムと合わせて改めて紹介し、「回を重ねるごとに参加者が増えていることは大変喜ばしいこと」と述べて来場者に感謝を示す一方、「家庭のお父さん、お母さん、学校の先生といった日々子どもたちと向き合っている人たちの参加が少ないことが残念」と発言。単に研究開発を進めるだけでなく、社会問題の解決に向けて、取り組みや成果を広く伝えていきたいという想いが伝わってきました。

続いて、総合司会を務める社会技術研究開発センターの安藤二香 アソシエイトフェローより、社会問題の解決を目指して研究開発に取り組むセンターや領域の紹介と、今回のシンポジウムの主旨について説明がなされました。

●講演●

■ 子どもを守る組織の課題



早稲田大学社会安全政策研究所 客員教授
田村 正博氏

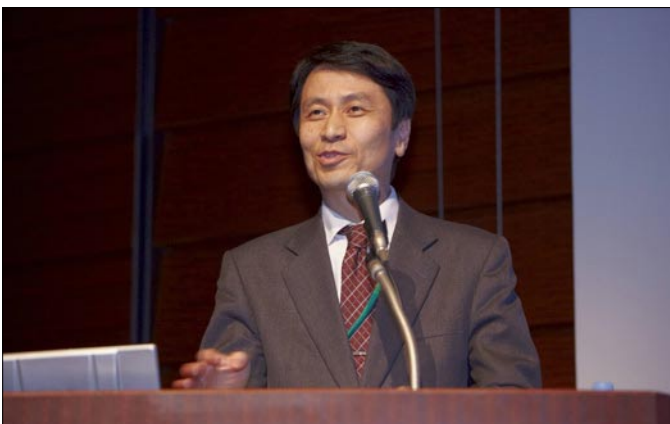
田村正博さんからは、大人の力の中でも公的機関の役割についての現状が語られました。

まず、「子どもの被害を防止する上で、加害者対策、危害空間対策、被害者対策の3つのアプローチが必要であり、その3つのアプローチで総合的に関わるのが警察、学校及び教育委員会、児童相談所の3つの機関である」と、公的機関の中でも子どもの安全に関わる機関を定義し、現在は、公的機関が果たしている実績をみないで、批判だけが行われているという認識を示しました。

そして、公的機関の権威は昔よりも下がり、警察も学校も児童相談所も、権威以外のもので、子どもを犯罪から守っていくためには、「市民がさまざまな公的機関の現実を認識し、支援をしていくということが不可欠である」と語りました。

さらに、公的機関同士の連携が成功している例として北九州市を挙げました。北九州市では、市の子ども総合センター（児童相談所）と同じフロアに、教育委員会の一部の機関と、警察の少年サポートセンターが同居していることを紹介し、「3つの機関が物理的に近い場所に存在していることで、目の前にいる子どもの利益を大事にするという共通の目的を自然にもつようになり、機関を越えた連携をスムーズにしている。同時に人的な交流もしやすいのでお互いの機関のもっているノウハウや限界を理解しあう関係ができる」と述べたうえで、「複数の公的機関や市民が連携して、子どもを犯罪から守っていくためには、それぞれの機関についての枠組みや現状をいかに共有していくかが重要になってくる」とこれからの公的機関同士のかかわり方、公的機関と市民のかかわり方について提言をしました。

■ 子どもたちの対人関係能力を向上させ自尊感情を育成するために



福岡教育大学教育学研究科 教授
小泉 令三氏

2人目の小泉令三さんは「子どもの力」を対人関係能力の向上という視点でお話されました。

「デブ、デブ、百貫デブ、お前の母ちゃん出べそ」昔の子どもたちはこのような言葉を使って、自分の中のストレスや嫌な思いを言葉で表現し、共有する方法で感情の処理をおこなっていたが、今の子どもたちはそのような方法を学んでいないと、昔と今の子どもたちの変化について語り、「そういう感情の処理の仕方を学ばないまま成長することで、キレたり、いじめにつながっていくのではないか」という認識を示しました。

さらに、「今の時代は人と直接関わる体験が極端に減っている。それを補うために学校で教育する必要がある」と、学校の新しい役割についての話の中で、ある学校で取り組んだ「心の信号機」の活動を紹介しました。心の信号機はちょっと手が出そうになったときにどのように対処するかを学ぶ学習スキルで、「まずは赤で止まってみる。次にくるのが黄色の段階で、ちょっと考える。いい選択肢を考えて、そして、青で行動しよう」というものでした。

「自分の周りの状況や他者の感情を理解したり、自分の感情をコントロールする対人関係能力が高まってくると、自尊心が高まってくる。それに犯罪の科学的知識や法規範などの知識を身につけることによって犯罪の加害者にも被害者にもならず、自分の身を守ることができる」と対人関係能力の向上が犯罪から身を守る手助けになることが語られました。

■ 子どもを守るリーダーをどうやって育てるか



社団法人日本教育工学振興会 会長
坂元 昂氏

そして、坂元昂さんは、地域の防犯指導者を養成するという「大人の力」の視点から防犯リーダーの具体的な要件や具体的な支援についてお話されました。

坂元さんたちのグループは、地域にあった防犯活動を考え指導できるような防犯リーダーの育成が課題で、それを支援する学習プログラムやシステム開発に取り組んでいます。一言で防犯リーダーといっても、そのイメージは人によって違い、具体的にどのような能力を養成したらいいのかがあいまいになってしまいがちです。坂元さんは、「防犯リーダーの指導項目については大きなカテゴリーとして37項目、そして具体的な行動として180項目をピックアップし、それぞれ指導能力規準表・基準表として明示しました」と語り、リーダーに求められる能力を具体化することで、この問題を解決しています。

そして、その指導能力表のそれぞれ項目に対応させたカリキュラム、テキスト、ビデオ、支援システムを試作していると報告しました。

試作したカリキュラムやテキストなどは、現在、各地の団体の協力で研修会を開き、その結果をフィードバックしてもらうことで改善を図っているとのことでした。また、たくさんの人たちが遠くまで行かずとも自分の住んでいる地域で受講できるように、それぞれの地域の特性や現場の状況に即した研修カリキュラムをつくっていけるような支援システムも構築し、その一部をプロジェクトのWebページに公開していることなども報告しました。

■ 犯罪を未然に回避するコミュニケーション能力



大阪大学コミュニケーションデザイン・センター 教授
平田 オリザ氏

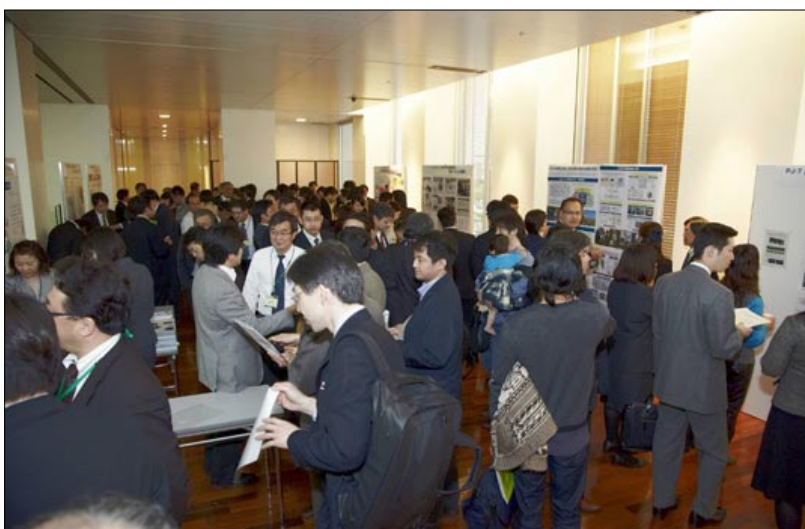
最後の講演者の平田オリザさんは「子どもの力」を演劇的な手法を使って育てていく試みについてお話されました。

平田さんは「演劇などのように、コミュニケーション能力を高める教育を施せば、それだけで子どもたちのコミュニケーション能力はある程度増し、子どもたちを犯罪から守る1つの力になる」と防犯におけるコミュニケーション能力の重要性を説きました。

そして、具体的に、子どもたちに劇を作ってもらった防犯教育プログラムの実践例をビデオ映像とともに紹介し、「演劇は実際にストーリーを演じることで、このときはどうしたらいいか、子どもたちに主体的に考えさせることができる。また、劇を演じた子どもとそれを見る子どもや保護者の方たちという関係の中で、演じることと見ることを両方体験することで理解が深まり、防犯に対する意識が強まっていくという効果もある」と演劇の効果について語りました。

●ポスターセッション●

講演終了後、13研究開発プロジェクトによるポスターセッションがおこなわれました。どのポスターにも人がひっきりなしに訪れ、出展者の話を聞いたり、意見交換をしたりと活発な交流がされていました。



ポスターセッションの様子。それぞれのポスターの前で活発な意見交換や交流がされていました。

●パネルディスカッション●

■ 子どもの力・大人の力を地域の力へ

ポスターセッション後のパネルディスカッションは、前半の講演で扱った「子どもの力」「大人の力」をどのように連携させて「地域の力」にしていくかということが1つの大きなテーマでした。そこで、前半の4名の講演者に加えて、長年、地域活動に取り組み、安全な地域社会の構築をテーマにしたプロジェクトを率いている池崎守さんをパネリストに迎えておこなわれました。コーディネーターは、計画的な防犯まちづくりを支援するシステム開発に取り組むプロジェクトの代表者を務めている山本俊哉さんです。



コーディネーターの山本俊哉氏・明治大学理工学部准教授とパネリストの池崎守氏・特定非営利活動法人さかいhill-front forum 理事長



パネルディスカッションでは、パネリストの方々の熱い意見が行き交いました。

パネルディスカッションは、会場からの質問を軸にして進められました。まず、子どもの力に関係することとして、平田さんが報告した演劇を取り入れた防犯教育に対してたくさんの人たちが関心を示し、「個別の事案の教育に使えないか」「従来の学芸会などの劇の指導とどう違うのか」などという質問があがりました。それらの質問に対して、平田さんは「専門家の皆さんと協力して、個別の案件に対するプログラムをつくっていききたい」「従来の劇指導との違いはつくるまでのプロセスを大切にすることと演劇的な手法で学習のモチベーションを高めることにある」と答えました。

小泉さんへは、「教師の感想に、子どもが変わったとあるが、親や社会が変わったのではないか」との質問が寄せられました。それに対し、「子どもや若者が変わったという話はどの時代にもあるが、最近の傾向として、子どもたちに対して指示が通らない、保護者にも先生がこうして欲しいということがなかなか理解されなくなってきた、などの具体例がある。これは権威に対する捉え方が変わってきたことの表れではないか」と、学校現場が感じている子どもや保護者の変化について、小泉さんからの返答がありました。そして、「知らない人と話をしてはいけないという教育を受けている子どもたちが、コミュニケーションを高めていけるのか」という質問に対して、以前は地域のコミュニティの中で身につけていたものが、今はその機会がなくなってしまったので、学校の中で効果的に提供してプログラムとして身につけてもらおうという考え方が示され、議論が、地域論へと進んでいきました。

地縁血縁型社会は限界になりつつあり、かつての強固なつながりをもつ地域社会から、それぞれの共通の関心事だけでつながっていく緩やかなネットワーク社会を作っていく方向にあるという指摘に対して、「新しい地域社会をつくるうえで、防犯活動のもつ意味はたいへん大きいと思う。地域の活性化を目指して活動しても住民があまり積極的に参加しなかったが、防犯活動をしましょうと呼びか

けると参加する人が多くなった。つまり、入り口が地域防犯でも出口が地域社会の人間関係の再構築につながっていくのでは」と田村さんが防犯活動と地域社会のあり方に言及しました。

さらに、坂元さんからは、「最近問題になっている、近親者や知り合いからの被害を防止したり、大人が子どもを見守ると同時に、子ども自身の防犯力をつけていくうえでも、地域の大人が見守る地域環境防犯力が大切になってくると思います」と、地域の人たちがお互いにお互いを見守っていく、地域環境防犯力という考え方が示されました。

また、「排除にならない地域防犯にしていこうためにはどのような工夫や知恵が必要か」という質問に対して、池崎さんは「排除しないで、共に地域を支える人間なんだと、誰でも受け入れるという姿勢が大事」と返答。それを受けて平田さんがソーシャルインクルージョン（社会的包摂）という考え方を紹介し、「社会から孤立してしまうと犯罪につながったりと社会的リスクも大きくなります。孤立する人を出さないようにするために、ボランティアでもスポーツでも、何でもいいから少しでも社会的な活動に参加してもらえるように、どのように社会的な包摂を構築していくかが最大の防犯になる」と話しました。

そして、コーディネーターの山本さんが「みなさん、それぞれの立場で取り組んでいることがお互いを補完するような形になり、最終的に地域の力として、防犯だけでなく、他にもつながっていく要素となる」という共通認識が得られたことを挙げ、ディスカッションを終えました。



社会技術研究開発センター センター長
有本建男氏

最後に有本建男センター長が閉会の挨拶をしました。挨拶の中で、社会技術研究開発センターが4年前に研究体制を大幅に変えて現在のような体制にしたこと、新体制になって最初に立ち上げたのがこの領域であること、研究も各プロジェクトリーダーとセンターが議論を重ねて模索してきたことなどを紹介しました。

そして、「この問題は成熟した手法はたぶんあり得ない。常に何がいい方法なのかを模索しながら研究を進めていかざるを得ないので、そのためには皆様方の応援がないと持続できないのです」と更なる支援を参加者に呼びかけ、シンポジウムを締めくくりました。

●取材を終えて

子どもの安全を守るためには、子どもを見守る大人の防犯意識の向上はもちろん、子ども自身の意識や知識の向上も必要なのだと思いますし、個人個人が高めた力をより有効に発揮するには、地域の人たちや学校、警察などにつながることが重要だということもわかりました。また、防犯活動の取り組みが地域社会の活性化や再構築へと導く鍵になるというお話がとても印象に残りました。

(文 荒船 良孝、写真 田中 章雅、文責 (株) ミュール)